

大島先生の複眼的思考について

岡田俊之輔

「たうとうさういふ時代になつたのですね。」

今から二十年程前、第一文學部英文學專修主任となつた大島一彦先生に對し、他學部本屬の或る兼擔教授が英語科目出講アンケートの欄外に寄せた言葉である。當時は現在と異なり、英語の兼擔教員や非常勤講師の差配も英文科主任名で行つてをり、アンケートの回答を取纏めてゐる助手の私は偶々目にしたのであつた。昭和一桁生れの諸先輩があらかた主任職を務め終へた後、いよいよ若手筆頭、昭和二十二年生れのスタッフが新主任に就く——「さういふ時代」の流れ、世代交代の象徴性に、かの兼擔教授も感じ入る所があつたのぢらう。然るに、その「若手」であつた大島先生もつひにこの春、停年を迎へられる。改めて時の流れを感じずにはゐられない。

早稻田の英文科關係者なら誰しも一度は訪れたであらう、大久保の今はなき酒場「くるがね」に始めて連れて行つて戴いたのも、ちやうどあの頃だつた。上梓されたばかりの御著書『ジェイン・オースティン』——「世界一平凡な大作

家の肖像』（中公新書、平成九年）にサインを戴いたのも、くるがねに於てであつた。何とも落著いた氛圍氣の店で、普段外では殆ど飲まぬ私が（チエイン店を除けば）恐らく最も多く通つた酒場かも知れない（とはいへ、その回數なぞ高が知れてゐるけれど）。先生の隨筆「寄道——小沼丹先生の横顔』（慧文社刊『小沼丹の藝 その他』所收）には、お師匠さんとの公私に亘る、或は教場と酒場に亘る、そしてこれから時代には最早あり得ぬであらうやうな濃密なる師弟關係と共に店の様子が詳しく描かれてゐるが、さういふ小沼先生との思ひ出に満ちた、大島先生にとつて掛替への無い大切な場の風情を、私はあらう事か二度も汚してしまつたのである。二度とも偶然居合せた同一の先輩と數週間のインタヴアルを挟んで激しい口論をやらかし、その結果、女将さんや常連さんには多大なる不快の念を與へてしまつた筈だ。けれども口論の後、なほも忿懣遣る方無い私に向つて先生は、別に叱るでもない、穏和な口調でかう仰有つた、「岡田君、彼は君と同じゼミ出身の先輩だらう?」：ならば些細な話で仲違ひしたり、事を荒立てたりせず、自分には見えてゐない相手の資質にも敢へて目を向けてみてはどうかねといふ、如何にも大島先生らしいお人柄を窺はせる御助言と私は受取つた。

特定の觀點に捕はれるのではなく、物事を一旦は相對化して複眼的に觀る事——先生の文學鑑賞法も、延いては生

き方も、要是はこれに盡きると思ふ。例へば吾々門下生よりも古くから教はつてゐた松原正先生について、「松原氏はひとところ一部の人達から右翼たとか保守反動だとか呼ばれたことがある。今でもさう思つてゐる人がゐるかも知れない」が、それは「所謂左翼進歩派の人達」の「生真面目な神經を逆撫で」する「氏の物云ひの一部」や「戦争は無くならない」といふやうな一見物騒な「著作の表題」をただ相的に捉へてゐるからであつて、「おほかたの讀者」は氏の「發想の根本にユーモア精神がある」事を見落してゐるから「強張りを免れた柔軟な姿勢」が讀取れないのだと、さう指摘する（圭書房刊『松原正全集』第一巻「解説」）。直弟子ならざるがゆゑに見える、寧ろ熱狂的な愛讀者こそ卻つて見落しかねない「保守派の論客」松原正の重要な側面と言へよう。同様の考察は、これまた若い頃に習つて以來の間柄である臼井善隆先生についても爲されてゐる。曰く、先生のジョージ・オーウェル論には「表面的には左翼進歩派の政治理批判が述べられるが、その據つて立つ所は右翼保守派の政治理ではなく」、E・M・フォースターとも通ひ合ふ、「decencyへの深い思ひである」のだが、「臼井先生の文章からそのところを讀取つてゐる人は案外少いかも知れない」と（『英文學』第八十三號掲載「臼井先生のこと」）。教條的なイデオロギーよりも人間としての眞つ當な感覺を重んずる言論人・臼井善隆の本質を確か

に突いてゐる。

かうした複眼的把握は御専門のジェイン・オースティン研究にも勿論生かされてゐるのであり、それは抑もD・H・ロレンス、ジェイムズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフといった二十世紀英文學の極北を讀抜く事から始つた先生の研究生活とも密接に絡るものなのである。前掲のオースティン入門書に於て、彼女の小説世界の單純素樸ぶりに飽足らぬ向きには、御自身の舊稿を引きつつ以下のやうに説く。すなはち、現代喫緊の課題を追究したければ無い物ねだりをせず、例へばトルストイを、ドストエフスキーやロレンスを、ジョイスやウルフやフォーカナーを、カフカやカミュを讀めば宜しい。しかしオースティンの提示する心象風景は、現代人とて「やはり心のどこかに留めておいて、決して見失つてはならない筈のものだと思ふ」。そして「これは私の竊かな考へなのだが、現代の文學と眞剣に取組んで、その問題點を心の底深くに沈潜させ（頭の中に溜込んでおくと云ふことではない）、さうしてオオステインを讀む、これが一番いいオオステインの読み方ではないだらうか。そのとき初めて「彼女を評して」漱石の云ふ『平凡の大功德』の意味が實によく判るのである。」

オースティン龜殻のG・K・チエスターも同じやうな事を言つてゐる、「平凡なものは非凡なものよりも價値がある、いや非凡なものよりも更に一層非凡なのである」

（『正統』第四章「妖精の國の倫理學」）。逆説を好む如何にもチエスタントンらしい臺詞だが、非凡よりも平凡に堂々と信を置けるのも、畢竟、様々な奇矯な異端を潛り抜けた末に素樸な正統を撰び取るに到つた彼のカトリック信仰の爲せる業と看做して良からう。詰り、確乎たる宗教的信仰があるからこそ自信満々、平凡に安んずる事が出来る譯である。その點、さうしたものを有しない日本人・夏目漱石も、そして大島先生も、聊か不安定な行き方を強ひられるのではないか。漱石は「則天去私」と言つた。然らば先生は如何。ともすれば價值相對主義の泥沼に嵌りかねない複眼思考の緊張を支へてくれるものは一體何か。酒の神バッカスへの信仰はこの際措くとして、窮極の所、宗教的正統ならぬ歴史的傳統への信頼がそれであらう。別けても、文章に携はる者として、歴史的假名遣を固守してをられる。前掲書『小沼丹の藝』には、この假名遣の正統性を説く福田恆存著『私の國語教室』の書評が收められてゐるが、同書を「讀んだことで、傳統の一つを見附け出し、そしてそれを信じたのである」と結ばれてゐるところ、これは一種の「信仰告白」と呼んで差支へあるまい。「信仰」の要は以下の如し——「歴史的假名遣ひは單に合理的で、姿に氣品があるだけではない。これを自覺的に用ゐるならば、何氣ない一字一句であつても、常に日に新たに傳統を救ひ出すやうに出來てゐる。」

一見どんなに素樸平凡な言葉でも、内には歴史と傳統の重みが宿つてゐる。さういふものを自覺的に救ひ出すやう絶えず心掛けてゐれば、言葉の問題のみならず人生一般に於ても、大向うを喰らせるやうな奇矯非凡な事どもに惑はされず、事の輕重を自づと辨別する姿勢が身に附かうといふものだ。大島先生一流の複眼的なバランス調整が單なる全方位外交、八方美人に墮する事の無いゆゑんである。

（本學文學學術院准教授）

『英文學』第百四號への投稿論文は計三本、査讀・審査を行つた後、總てを掲載する事とした。内訣はジェイムズ・ジョイスを論じた日本語論文一篇、及びヴァージニア・ウルフ論、英語教育論の英語論文二篇である。今後とも會員諸氏からの力作を期待してゐるので、奮つて投稿されたい。

なほ本號は、大島一彦教授の停年退職記念特輯號である。御本人、そして先生と縁のある後輩同僚や教へ子から寄せられた隨想を數篇収めたが、それらを御覽になれば、大島先生が學生、助手、専任教員として五十年以上、途切れ事無く早稻田の英文科に籍を置き、支へて來られた事の意味が自づと窺はれるであらう。拙稿にも記したとほり嘗ては「若手筆頭」として、今は「長老」として、脈々と受け継がれて來た美風を前世代から次世代へと傳へてゆく、さういふ得難い媒介者の姿が脳裡に浮ぶに違ひない。然らば、その傳統的「美風」とは如何なるものか。私も學部生の頃に拜讀した本誌連載の論攷を中核と成す先生の處女出版『ジエイムズ・ジョイスとD・H・ロレンス』(旺史社刊)の「あとがき」には、例へば次のやうな件りがある。

筆者は作家を論ずるための特別な立場も批評方法論も何ら持合せてはゐない。昨今流行の何とか主義も何

とかクリティシズムも筆者には無縁である。ジョイスとロレンスを論じた文章の冒頭で、兩作家の精神的肖像畫を描くと云ふ云ひ方をしたが、各篇の狙ひは全てそこにあると云つてよい。何らかの形で感銘を受けた作家の精神の姿、輪郭、色合ひを自分なりに描いてみること——それが大きな畫布の入念な油繪であり、鉛筆畫の軽い素描であれ——目下の筆者には作家に就いて書く動機はそれ以外にないやうな氣がしてゐる。

「處女出版」などと口にしたら、それこそフェミニスト・

クリティシズムの立場から批判を受けさうだが、私見では、右記の如き文學研究の態度こそ吾が英文科のうるはしき流儀であつた。その流儀を貫けたといふ點で、大島先生につては正に恵まれた半世紀だつたのではないかと思はれるが、かういふ眞に文學を愛好する者にとって自明の事どもを、昭和の終りに敢へて書かねばならなかつたといふ事自體、昨今の英文學研究の激變ぶりを反映してゐよう。自分のやつてゐる事は立派な科學的研究なのだと、さう思ひたがる學者馬鹿ほど「文學理論」とやらに走りがちだけれども、自然科學の嚴密な觀點からすれば、そんなものは所詮「理論」の名にたうてい價せぬ擬似科學的な代物に過ぎまいか。(アラン・ソウカル事件を想起せよ!) ならば、たゞひ自然科學者から趣味だの道楽だと輕蔑されようが、堂々

と王道を歩んでをればよいではないか。人文「科學」を標榜する事が郤つて人文學の衰亡を招來するのである……などと言つてみたところで、最早どうにもなるまいが。

本號の編輯には英文學コース助手の牟田有紀子さん、博士後期課程院生の篠原健吉君、三浦晃君、齋藤寛子さんの手を煩はせた。ここに記して謝意を表する。また牟田さんはこの春から他大學にて教鞭を執る事が決り、助手職を早期退任する事になつた。前途を祝したい。

(編輯幹事 岡田俊之輔)